

心の耳で聞く

〇〇〇〇〇—

インドのサンスクリット語に、「先陀婆（せんだば）」という言葉があります。この言葉ひとつで塩を意味し、食器のことも指し、また水や馬をも意味するので、とてもまぎらわしい言葉です。

それというのも、この言葉はもともと、「インダス河流域に産出するもの」という意味で、そこから塩、器、水、馬が産出されたので、これらの代名詞として使われたわけです。

そこで、意味を混同しやすいこの言葉を改めてはどうでしょうかと、弟子たちが釈尊にお尋ねしたところ、釈尊は「いや、ことさら変える必要はありません」と言われた。

何故か。人は眼、耳、鼻、舌、身、意の六根の門戸から入るものよりも、心の眼、心の耳を開き、対象をそのままにしておけば（先陀婆をかえずにおけば）、天眼、天耳などの通力を得る修行になるから変える必要はない、とおっしゃったのです。

たとえば、王の臣下でもすぐれた者は、王が「先陀婆を持って来い」と命じただけで、それが塩なのか、水なのか、それとも食器なのか馬なのか、すぐにわかる。

何故なら、王が食事をしているのか、手を洗いたいのか、飲み物を飲もうとしているのか、外に出かけようとしているのかがわかれば、その時々において、先陀婆が何を指すかはすぐに了解できるからです。

これを心の耳で聞くといい、さらに進むと言葉がなくても、心眼で分かるようになるといいます。

道元禅師の「正法眼蔵」に、夢判断のことが書かれています。ある和尚が夢から醒めて、弟子に「今、わしが見ておった夢はどんな夢か判断せよ」と言ったところ、弟子は「承知しました」と言って、すぐに洗面の水を持ってきた。和尚がさらに別の弟子に同じことを言ったところ、その弟子は、すぐさまお茶を持ってきたという。

これも弟子たちが、心の耳で和尚の夢の声を聞いた上での所業というべきでしょうか。

